

芥川龍之介の聖霊観：「西方の人」をめぐって

林，薫植
慶南大学校

<https://doi.org/10.15017/16011>

出版情報：Comparatio. 5, pp.68-81, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



芥川龍之介の聖霊観

——「西方の人」をめぐって——

林 薫植(LIM Hoon-Sik)

I. 序 言

聖書によると、イエスは聖霊によって身ごもったマリアから生まれたという。芥川の「西方の人」のなかには、その聖霊のことについて述べた文が載っている。まず、芥川は聖霊をどういうふうに描写しているかを調べるために、「西方の人」のなかの〈3 聖霊〉の全文を確認しておきたい。

3 聖霊

我々は風や旗の中にも多少の聖霊を感じるであらう。聖霊は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖霊にDaemonの名を与えてゐた。のみならずいつもこの聖霊に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖霊の子供たちは——あらゆるクリストたちは聖霊の為にいつか捉はれる危険を持つてゐる。聖霊は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異なるものである。我々は時々善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見るであらう。善悪の彼岸に、——しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた。

以上の本文から分かるように、芥川は聖霊についてキリスト教においての本質的な聖霊のイメージとは懸け離れた主張を展開していた。つまり、芥川は聖霊について、〈聖霊は必ずしも「聖なるもの」ではな>く、〈「永遠に超えんとするもの」である>と主張している。要するに、一言でいえば、聖霊は〈「永遠に超えんとするもの」>であると言っているのである。

芥川は〈2 マリア〉において、マリアは〈「永遠に守らんとするもの」>であると主張していた。このようなマリアに対する性格づけは、聖霊の性格とは対極概念のように見える。

とすれば、いったいこのような主張は何を意味するのか。これは結局、聖霊とマリアをどういうふうに解すべきかに関わる問題であり、ひいてはこの問題の解決は、その子であるイエスの本質の究明への糸口になるだろうと思う。というわけで、本稿においてはその先決問題として、聖霊のことについて考察したいと思う。

II. 芥川における聖霊

聖書においての聖霊(Holy Spirit)は、創造者なる神の霊、またはキリスト教神観でいう三位一体(父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊)の中の第三位格で、人間の霊的経験の中に現臨して働きかける神である。

しかし芥川はその聖霊を〈「聖なるもの」ではな>く、〈神とも異なるものである>と断言しつつ、聖霊は〈「永遠に超えんとするもの」>という定義を下していた。つまり、芥川は聖書においての神学的な意味の聖霊を否定しているのである。では、芥川における聖霊はどういう意味であるか。

芥川の聖霊、すなわち「西方の人」の聖霊に関する先行研究においては、この聖霊の問題をマリアと並行して、対立的構造の上で論じているのが一般的であった。つまり、マリアとの関わりの上で、＜二極構造＞（笹淵友一）とか＜対峙葛藤＞（佐藤泰正）などの対立構造に考察されていたのであった（注1）。

これは勿論、マリアと聖霊のことを、それぞれ＜永遠に守らんとするもの＞と＜永遠に超えんとするもの＞とに、対立的なもののように表現している芥川一流の表現に影響された結果であると思う。

その中で、特に注目したいものは聖霊にその象徴性を見ている説であった。つまり梶木剛は、聖霊とは＜知識＞の意味であり、その聖霊の子のキリストは＜知識人＞の象徴であると主張していたのである（注2）。また、佐藤泰正は聖霊に＜一個のデーモン＞を見ていた（注3）。

しかし、このような研究者の論説も、やはり「西方の人」における究極の聖霊論であるとは言えないと思う。というのは、芥川一流の表現に対するより深い綿密な考察の上で、聖霊の定義を下さねばならないと思うからである。

以下、これらの論説とともに先行研究の説を見直した上で、聖霊というものの意味とその象徴性を考察することとする。

「西方の人」に現れている聖霊に関する表現の中で最も印象的なものは、聖霊は＜「聖なるもの」ではない＞という芥川の宣言であると思う。そのうえ芥川は、聖霊は＜神とも異なるものである＞といていた。要するに芥川は、聖霊は神ではないと主張しているのである。これは神学における聖霊の神性を全面否定することを意味する。

先述した通りに、聖書の中の聖霊が、“聖なるもの”であることはいうまでもなかろう。つまり聖霊は創造者なる神の霊、またはキリスト教神観でいう三位一体の第三位格、人間の霊的経験の中に現臨して働きかける神なのである。要するに聖霊とは、神またはキリストの霊のことで、旧約聖書では神の霊が終末の時に救い主に豊かに注がれ、イスラエルの民全体にも降って、新しい時代が到来すると信じられ、待望されたのである。この待望のとおり、イエスは聖霊によって生まれ、聖霊の力に満ちて活動したのである。イエスの誕生と受洗、そして悪魔の誘惑の時などに聖霊は働いたのである。また、イエスの弟子たちが病気なおしや殉教の際に発揮した不思議な超能力も、聖霊の働きなのであった。

ところで、芥川はこのような聖書の聖霊の本質を否定しているのである。聖霊の最も大事な役割は、イエスを誕生させたことであったといえる。しかし、聖霊によるイエス誕生の奇跡を、芥川は皮肉な目で見えていたのである。このように、聖霊の本質に対する芥川の否定的な観念は、結局聖書と異なる表現のもとになるのは当然であろう。芥川はこの聖霊を次の如くも表現していた。

彼（イエス→論者注）は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けてゐた。

（36 クリストの一生）

芥川は、イエスの一生は父の聖霊が支配していたと主張している。この聖霊は、イエスの誕生にも影響を与えたのである。つまり、聖霊の力の支配によってイエスは生まれたと、芥川は見ているのである。それは次の文からも分かるであろう。

――（前 略）――美しいマリアはクリストの聖霊の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の

為にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に――或は人気のない夜中に突然彼女を驚かした聖霊の姿も思ひ出したかも知れない。――（後 略）――（続8 或時のマリア）

（下線引用者）

上の下線の引用文は、聖霊の絶対的な力があつたことを意味するといえる。つまり、夜中に聖霊はマリアを襲って強姦したかに、芥川は皮肉に見ているのである。こうしてイエスは、この聖霊とマリアを父母として生まれたのであつた。要するに、イエスは運命的な父母によって生まれた運命の子であつたといえる。という訳で、イエスは＜聖霊の子供＞（10 父）として、聖霊の支配を受けながら彼の一生を歩んで行くのである。

結局、聖霊が支配していたとは、イエスの一生は聖霊が牛耳つたという意味であろう。つまり、イエス自身の意志とは関係なく、聖霊の思うままにイエスは動かされたといえる。

という、もはや芥川における聖霊は何を意味しているかは、明らかになったといえよう。イエスをマリアに生ませ、そのイエスを十字架の死へと導いた聖霊を、芥川はイエスの“運命”と見なしているのである。イエスの父が聖霊であり、イエスは一生聖霊の支配を受けたということは、結局イエスには、運命の力が働いていたことを意味するに相違ないと思う。

Ⅲ. 運命的な誕生

〔1〕イエスとヨハネの関係

芥川は、イエスを生ませた聖霊を“運命”としてとらえていたというのは、先述したとおりである。そのような芥川の観念は、次の文の下線のところを見ても分かるだろうと思う。

マリアはエリザベツの友だちだつた。バプテスマのヨハネを生んだものはこのザカリヤの夫、エリザベツである。麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない。我々の一生を支配する力はやはりそこにも動かされてゐるのである。（5 エリザベツ）

（下線引用者）

上の引用文は、イエスに洗礼を施したバプテスマのヨハネの母であるエリサベツと、イエスの母であるマリアとは親戚関係であつたことについての芥川自身の見解である。

バプテスマのヨハネ（John the Baptist）は、祭司ザカリヤとその妻エリサベツの間に生まれた旧約最後の預言者であり、ルカの福音書には、ヨハネはイエスとは親戚に当たり、6カ月年長と記されている（ルカ1章）。このヨハネは共観福音書の中にイエスの先駆者として描かれているが、領主ヘロデ・アンテパスに対してその結婚の不道德を責め、民衆を扇動した咎により捕らえられて後、斬首された人物である。

イエスにバプテスマを施し、またイエスの先駆者として活躍したヨハネは、イエスの存在には必要欠くべからざる人物であると言えよう。特に注目すべきことは、イエスもこのようなヨハネを賞賛している点である。

¹⁰この人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。¹¹まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天

の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。（マタイの福音書11：10～11）

（下線引用者）

イエスはヨハネについて、＜女から生まれた者の中で＞はバプテスマのヨハネが最も偉大であると言って、彼を褒めている。ところで、ここで留意すべき点は、＜女から生まれた者の中で＞という表現であると思う。この＜女から生まれた者＞とは、ヨブ記にも三回出てくる表現で（ヨブ14：1、15：14、25：4），“死ぬべき人間”を意味する表現である（注4）。

この“死ぬべき人間”とは、神とも異なる“平凡な人間”を意味すると思う。という訳で、＜女から生まれた者＞の“女”とは、平凡な女性を指すのである。結局イエスのこの言葉は、“バプテスマのヨハネは平凡な女性から生まれたものの、偉大な人物になった”という意味であるに相違ない。

芥川は＜2 マリア＞において、マリアを＜あらゆる女人＞と＜あらゆる男子＞にも感じるし、また＜我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や巖畳に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感じる＞と主張して、マリアの平凡性を強調していた。という、結局イエスの場合も“平凡な女性のマリアから生まれたけれども、偉大な人物になった”と言えないはずがないと思う。実際、芥川はイエスに対して＜天才＞と表現していたのである。

- ・ クリストは僅かに十二歳の時に彼の天才を示してゐる。（13 最初の弟子たち）
- ・ 彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジヤアナリストだつた。同時に又我々の人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。（続22 貧しい人たちに）

（下線引用者）

天才が偉大な人物であるのは言うまでもなかろう。という訳で、イエスもヨハネのように、“平凡な女から生まれたものの、偉大な人物になった”のである。“平凡な人間”とか“平凡な女”といっているのは、上の下線の引用文に現れている、＜我々の人間の生んだ＞という表現からも証明することができると思う。つまり、ここの＜我々の人間＞とは“平凡な人間”という意味なのである。結局、＜我々の人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた＞とは、“平凡な人間、すなわち平凡な女が生んだ偉大なる人物、つまり天才だった”という意味であるに相違ないと思う。

要するに、芥川はイエスもヨハネも平凡な女性から生まれた偉大なる人物と考えていたのである。

〔2〕麦と芥子の相関関係

ところで、芥川は第5章＜エリザベツ＞の中でヨハネの誕生について、＜麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない＞と述べていた。この＜麦の中に芥子の花の咲いた＞とは、いったいどういう意味であるか。

麦類は聖書に総称して“穀物”と呼ばれ、地中海世界の生活必需品をなしていた（注5）。この麦が生活の必需品であったということは、パレスチナ地方の最も普遍的な穀物として、日常の食物であったことを意味する。

一方、＜芥子＞のほうを見てみると、新約聖書の中には“からし種のたとえ”が載っている（マタイ13：31～32、マルコ4：30～32、ルカ13：18～19）。ここではマタイの福音書の聖句を引いてみる。

³¹イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、³²どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」

(マタイの福音書13：31～32) (下線引用者)

この＜からし種＞は、厳密には＜どんな種よりも小さい＞ものではないが、当時イスラエルでは最も小さい種と考えられ、小さいものの代名詞のように使われていたのである。イエスもからし種のこのような象徴性を利用して、群衆と弟子たちに神の真理をたとえで話してきかされたのである(マタイ17：20、ルカ17：6)。

パレスチナのからしは、最も小さい種から三、四メートルの木に生長する。最も小さい種が野菜のうち最も大きなものとなる対照的現象に、イエスは極めて小さなものから偉大な成長をとげるたとえとされた。つまり天の御国の拡大する生命力を示されたというのが、聖書においての意味なのである。

ところで、＜5 エリザベツ＞の本文に現れている＜芥子＞の漢字には、“けし”という振り仮名がついていた。しかし、“ケシ”(芥子)という植物は聖書には出てこない。というと、芥川はどういう理由でこれを“ケシ”と言っているのか。

周知のごとく、“芥子”(ケシ)は英語では“poppy”といって、ケシ科の一、二年草のことである。高さ80～170センチメートルで、全体に白粉を帯び、初夏、枝の先端に白、紫、紅などの四弁花を開く。果実は球形で黄褐色に熟すが、未熟のものからは阿片・モルヒネの原料になる乳液を採る。このため一般の栽培は禁じられている特異な植物なのである。なお、観賞用に栽培されるオニゲシ・ヒナゲシなどもケシ属の植物であり、特にヒナゲシには美人草・虞美人草などの別称がある(注6)。

結局、芥川はこのケシの植物を考えていたに違いないと思う。それは、きわめて微細なもののたとえとして、“芥子粒”(ケシツブ)という日本語の比喩の言葉は使われているが、“カラシ粒”とか“カラシ種”のようなたとえは、日本語にはないことから証明できよう。

要するに、当時の芥川は聖書の“芥子”を、“カラシ”ではなく、poppyの“ケシ”と理解していたに相違ないと思う。なぜかというと、そうすることによって第5章の＜エリザベツ＞を書いた芥川の意図が明確に伝えられるからであるが、それについては次の章で明らかにしたい。

〔3〕＜麦の中に芥子の花＞の意味

芥川が、＜麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然＞であると述べている理由は何か。言い換えれば、＜麦の中に芥子の花の咲いた＞ということは、何を意味するのであるか。

＜麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない＞という文は、＜麦＞と＜芥子＞に対する芥川の認識による表現であると思う。

先述したとおり、＜麦＞は日常生活に欠かせない食物として、きわめて平凡な穀物であった。つまり、芥川の観念においての＜麦＞は、平凡性の象徴であったといえる。

その反面、＜芥子＞は“美人草”という別称もあるように、初夏、白色、紅色、紅紫色、紫色などの四弁からなる美しい花を咲かせるのである。聖書においての＜芥子＞の正しい読み方は“カラシ”であったのは、前に調べてみたとおりである。が、芥川が意識であれ無意識であれ、これを“ケシ”と言っているのは、美しい＜芥子＞への特別な認識があったからに違いないと思う。つまり、芥川は＜芥子＞を特異性・非凡性の象徴と考えていたと言える。

要するに、芥川は＜麦＞と＜芥子＞とを対照的にとらえていたのである。このような芥川の考えは、前に触れたとおりに、共観福音書に載っている“からし種のたとえ”の内容が影響を与えたといえる。それは、最も小さい種の代名詞である“からし種”が成長して、野菜のうち最も大きなものとなる対照的現象に、イエスは天の御国の拡大する生命力のたとえを見出されるのであった。

というと、＜麦の中に芥子の花の咲いた＞という芥川の主張の意味は、既に明確になったと思う。それは、“平凡な麦畑に、珍しいことに非凡な芥子の花が咲いた”という意味であるのは言うまでもなかろう。つまり、“平凡性のものの中の非凡性のもの”に対する芥川の暗示であるに相違ない。

結局、これは文の前後を考えてみれば、“平凡な母から非凡な子が生まれる”という、偉大なる人物の誕生に対する芥川の観念の現れであると思う。

IV. 偶然という運命

イエスとヨハネの特別な因縁のことを、芥川は＜麦＞と＜芥子の花＞の関係で感想を述べていたが、その芥川にとって＜麦＞は“平凡性”を象徴するものであり、＜芥子＞のほうは特異性、すなわち“非凡性”の象徴であったということは、前に調べてみた通りである。というと、＜麦＞は二人の平凡な女性、すなわちマリアとエリサベツを指し、＜芥子＞は二人の非凡な人物であるイエスとヨハネを意味するに相違ないと思う。

ところで芥川は、＜麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない＞と述べているのである。言い換えれば、“平凡な女性から非凡な偉大なる人物が生まれたのは偶然である”という意味になろう。要するに、芥川は人生においての“偶然性”を強調していたと思う。そのような芥川の見解は、次の文をその後に書き添えていることから証明することができよう。

我々の一生を支配する力はやはりそこにも動かされてゐるのである。（5 エリザベツ）

上の文で芥川は、“我々の一生を支配する力は、やはりこのような偶然によるところが多い”と述べている。ところで、＜我々の一生を支配する力＞とは何を意味するのか。

彼（イエス→論者注）は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けてゐた。

（36 クリストの一生）

芥川は、イエスの一生は父の聖霊の支配を受けていたと主張する。芥川における＜聖霊＞は、我らの人間の人生を支配する“運命”の意味であったというのは、前に触れたとおりである。

芥川は聖霊の神学的な解釈を拒否して、聖霊によって生まれたイエスの誕生の奇跡をシニカルな目で見えていた。このように、“聖なるもの”という聖霊の本質に対する芥川の否定的な観念が、当然聖書と異なる表現のもとになったと思うのである。

イエスの誕生の際、父としての役割をした聖霊は、以後もイエスの一生に甚大な影響を与えるのであるが、これを芥川は、イエスの一生は父の聖霊が支配していたと主張しているのである。

結局、イエスは運命的な父母によって生まれた“運命の子”であったといえる。という訳で、

イエスは＜聖霊の子供＞（10 父）として、以後も聖霊の支配を受けつつ一生を歩んでいったのである。

以上見てきたとおりに、イエスの一生を支配していたのは、聖霊であったことが分かった。という訳で、芥川が本文において＜我々の一生を支配する力＞といているのは、“聖霊”を意味するに違いないと思う。

さらに芥川は、イエスをマリアに生まれ、そのイエスを十字架の死へと導いた聖霊をイエスの運命と見なしていた。イエスの父が聖霊であり、イエスは一生聖霊の支配を受けたということは、結局イエスの中に運命の力が働いたことを意味するに相違ないのである。要するに、本文においての芥川の主張の意味は、“我らの人生は偶然という運命によって支配される”ということになる。

この“偶然”と“運命”について、芥川は「侏儒の言葉」（「文芸春秋」、大正12・11～14・11）の中で次の如く注目に値する見解を述べていた。

遺伝、境遇、偶然、——我々の運命を司るものは畢竟この三者である。自ら喜ぶものは喜んで善い。しかし他を云々するのは僭越である。（「侏儒の言葉」）（下線引用者）

上の引用文は、人間の＜運命＞を司るものとしての＜偶然＞なるものの不可思議な力と役割について、芥川がいかにかそれを深刻に感じていたかをよく物語ると思う。

芥川は「小説を書き出したのは友人の扇動に負ふ所が多い」（1919年；大8・1月1日発行の「新潮」第30巻第一号）の中で、自分が作家になった動機について、次のごとく述べたことがあった。

——（前 略）—— 中学の五年の時に「義仲論」といふ論文を校友会雑誌に出した。これが一番始めに書いて出して見た文章であつた。しかし、当時ではまだ作家にならうといふやうな考は浮ばなかつた。将来は歴史家にならうといふやうに思つてゐた。——（中 略）—— その頃久米がよく小説や戯曲などを書くのを見て、あゝいふものなら自分達でも書けさうな気がした。そこへ久米などが書け書けと扇動するものだから、書いて見たのは、「ひよつとこ」と「羅生門」とだ。かういふ次第だから、書き出した動機としては、久米の扇動に負ふ所が多い。——（中 略）—— その後今日まで小説を書き続けてゐるが、本当に小説を書いて行かうといふ勇気を生じて來たのは、最近半年ばかりの事である。（注7）（下線引用者）

上の引用文に現れているように、当時芥川の将来の希望は歴史家であつて、作家になる考えはなかつたという。その芥川が創作をするようになった動機は、友人の扇動によってであつたという。結局、芥川が作家になったのは、自分の意志と決心によつたものではないことを意味する。言い換えれば、芥川は必然というより、運命的な偶然によって作家になったのである。それは次のような文によつても証明できると思う。

僕を作家にした偶然はやはり彼等をジャアナリストにした。

（二十 ジャアナリズム、「文芸的な、余りに文芸的な」）（下線引用者）

さらに、真の決心によつて小説を書き出したのは＜最近半年ばかりの事である＞という言葉及

は、最初は必然的な意志ではなく、偶然によって創作を始めたことをよく物語ると思う。要するに上の引用文は、芥川の観念に働く偶然という運命の力に対する証拠の好例になるといえる。

以上調べてみたとおりに、芥川は自分自身が作家になったことも、偶然という運命の力によってであると述べている。

つまり芥川は、彼自身運命に支配されていると考えるが故に、実母の発狂から芥川家の養子になったことも、本所の衰退した暗さを自己の背後に常に感じることも、家族の反対で自己の恋愛を貫き得なかったことも、家族の望むような結婚をしたことも、やむを得ないことと考えているし、その作品にも超自然的なものに動かされる人間が多く描かれることになる。しかしそういう自己を道化人形と観じている芥川でもあった（注8）。

“運命”の辞典的な意味は、人間の意志にかかわりなく、身の上にめぐって来る吉凶禍福で、それをもたらす人間の力を越えた作用と定義を下すことができよう。つまり、人間の企てや営みを含む宇宙の一切が、人間の意志にかかわりなく動かしがたい究極の定めに規制されていると考えるとき、その人知を越えた力を運命と呼ぶのである。それは様々な物を支配する不可避の必然の力であり、何人も従わねばならない、計り知りえぬ絶対の力なのである。これは、人生のすべての出来事は超人間的な力、すなわち天命によって支配されているという考えに基づいているのである。

超人間的な力として人生を支配する運命とその神格化ということは、運命に関する芥川の観念と相関関係をもつと思う。つまり、芥川は先に触れたアフォリズム集「侏儒の言葉」のなかで、さらに注目に値する見解を述べていた。つまり、芥川は＜百般の人事を統べる「偶然」の存在も認めるものであり、この＜「偶然」は云はば神意である＞（「侏儒の言葉」）と述べているのである（注9）。

芥川のこの見解において、特に留意せねばならない点は、＜「偶然」は云はば神意である＞という表現であると思う。これは人間のあらゆる面に関与し、人間の万事を支配する“偶然”という存在は、人間の理性の介入を不可能にするくらいのものであるから、結局この“偶然”は神の意志と同じだという意味なのである。

以上から分かるように、運命に関する芥川自身のこのような考えは、結局イエスの一生に投影されたと思う。つまり、平凡な母から生まれた聖霊の運命の子イエスは、一生の間、この運命的な聖霊の支配を受けながら自分の人生においての苦難の道を歩んでいったといえる。

要するに、結局＜3 聖霊＞の本文において芥川は、＜聖霊は必ずしも「聖なるもの」ではななく、＜唯「永遠に超えんとするもの」である＞と主張して、イエスをその聖霊に支配されている人物に描いていたが、これは人間の人生のうえに絶対的な影響を及ぼす運命を乗り越えようとする芥川の凄絶な足掻きの象徴的な表現であったと思う。

V. 主な語句の意味

〔1〕 Daemonとしての聖霊

ゲエテはいつも聖霊にDaemonの名を与へてゐた。のみならずいつもこの聖霊に捉はれないやうに警戒してゐた。（下線引用者）

まず第一に、＜Daemon＞のことであるが、一般に鬼神・守護神・悪魔などを意味するが、元

来は超自然的・靈的存在を表すギリシア語のダイモン（daimon）に由来する言葉である。ホメロスの詩ではダイモンは神々の一人であったが、のち外部から個人を支配する力は、善悪を問わず‘運命’を意味するようになった。“人間各自の性格はその人間のダイモンである”というヘラクレイトスの言葉は、そういう用例の一つなのである。

しかし、キリスト教の発展によってデーモンは異端として排斥され、悪霊・悪魔の意に転化するようになったのである。

その後、特に注目すべき点は、近代の芸術観においては天才崇拜の傾向に伴って、天才は一種の超人間的自然力（デーモン）にとりつかれ、デーモンが暗々のうちにその行為を導いているものと見なしたことである。この意味で天才は、天才の人格の特性の一つとして使われるドイツ語のデモーニッシュ（Dämonisch）な人格なのである。特に、ゲーテは芸術に働くデモーニッシュな力が、道徳的な世界秩序を突き破ることを指摘している。このようなゲーテの主張の根拠を調べてみよう。

ゲーテは『詩と真実』（1811～1833年）の第四部「神に抗うものは神のほかにはない」のなかで、次のごとく述べていた。

どんな概念にも、ましてどんな言葉にもとらえきれぬようななものがあるのを発見したような気がした。それは非理性的に見えたから、神的なものではなかったし、悟性を持たなかったから、人間的なものではなかったし、善意あるものだったから、悪魔的なものではなかったし、しばしば他の不幸を喜ぶふうがあったから、天使的なものでもなかった。首尾一貫性を示さなかったから、偶然に等しく、関連を暗示していたから、神の摂理にも似ていた。われわれを制約しているあらゆる事物も、このものにとっては滲透できるように思われ、それはわれわれの存在の必然的な諸要素を思うままに処理するように見え、また時間を凝縮し、空間を拡大した。ひたすら不可能事だけを喜び、可能事をせせら笑ってしりぞけるように見えた。それ以外のすべての事物の中に侵入して、これを分離したり結合したりするように思われたこのものを、わたくしは魔神的（デモーニッシュ）と名づけた。古代の人々やまたこれに似たものを認知した人たちのひそみにならったのである。わたくしはこの恐ろしいものを避けようとつとめ、いつもの習慣に従い、一つの形象の背後に逃げた。（注10）

（下線引用者）

ゲーテは、＜どんな概念にも、ましてどんなことばにもとらえきれぬような何ものか＞は、＜首尾一貫性を示さなかったから、偶然に等しく、関連を暗示していたから、神の摂理にも似ていた＞と述べている。簡単に言えば、ゲーテは＜何ものか＞を、＜偶然＞と＜神の摂理＞のようなものと言っているのである。さらにゲーテは、＜悪魔的なもの＞でもなく、＜天使的なもの＞でもない＜このものを＞、＜魔神的（デモーニッシュ）と名づけ＞ていたのである。換言すると、無意識の領域に働くとらえがたい超人間的・超自然的な力を、ゲーテは＜魔神的（デモーニッシュ）と名づけた＞のである。

しかしここで留意してもらいたい点は、ゲーテはこの＜何ものか＞に対して“聖霊”とは言っていないことである。ところが、芥川は＜ゲエテはいつも聖霊にDaemonの名を与えてゐた＞と言い張っている。どうして芥川はこのように主張しているのか。もう一度ゲーテの文を調べてみよう。

ゲーテはその＜何ものか＞を、＜偶然＞と＜神の摂理＞のようなものと言っていたというのは、先に触れたとおりである。さらにゲーテは上の引用文で、＜それはわれわれの存在の必然

的な諸要素を思うままに処理するようにも見えざるものであると述べている。つまり、我らの存在に必要なものを思うままに処理すると言っているが、これは結局、我らを支配しているという意味に違いないと思う。また、ゲーテの〈何ものか〉は〈悪魔的なもの〉でもなく、〈天使的なものでもなかった〉というが、芥川も〈聖霊は悪魔や天使ではない〉と主張していた。

こうなってくると、ゲーテの〈何ものか〉が何を意味するかは、もう明白になったと思う。要するに、ゲーテの〈何ものか〉は、芥川の主張する〈聖霊〉の意味であるに相違ないと思う。芥川における聖霊は、マリアにイエスを生ませた運命的な力であり、その運命の子イエスの一生を支配していたというのは、既に前において考察したことを思い出してもらいたい。

芥川の遺稿「闇中問答」（1927年；昭和2年9月）には、芥川晩年の心情が対話形式を通して吐露されているが、その第三章のなかで芥川は〈Daemon〉を次の如く描いていた。

或声 お前も亦俺の子供だつた。

僕 誰だ、僕に接吻したお前は？ いや、僕はお前を知つてゐる。

或声 では俺を誰だと思ふ？

僕 僕の平和を奪つたものだ。僕のエピキュリアニズムを破つたものだ。僕の、——いや、僕ばかりではない。昔支那の聖人の教へた中庸の精神を失はせるものだ。お前の犠牲になつたものは至る所に横はつてゐる。文学史の上にも、新聞記事の上にも。

或声 それをお前は何と呼んでゐる？

僕 僕は——僕は何と呼ぶかは知らない。しかし他人の言葉を借りれば、お前は僕等を超えた力だ。僕等を支配するDaimonだ。（注11）（下線引用者）

上の文に現れている芥川の言う〈Daimon〉は、〈僕の平和を奪つた〉悪魔的なものであり、〈僕等を超えた力〉、つまり超人間的な力であった。これは結局、ゲーテの名付けた〈魔神的（デモーニッシュ）〉であると思う。

以上調べたのを見ると、結局芥川はゲーテの〈何ものか〉を自分の〈聖霊〉として捉えていたに相違ない。これにはやはり芥川のゲーテへの深い理解力と、鋭い作家的直観がひらめいていたのを知ることができる。結局、〈ゲーテはいつも聖霊にDaemonの名を与へてゐた〉という芥川の主張は、ゲーテへの深い理解力による正確な表現であつたと思う。要するに芥川は、ゲーテのこのような主張に共感を覚えていたといえる。

〔2〕〈善惡の彼岸〉の意味

我々は時々善惡の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見るであらう。善惡の彼岸に、——しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた。

芥川は〈善惡の彼岸〉に聖霊が歩いているのを見るという。とすれば、当然〈善惡の彼岸〉とは何を指すか、が問題となるであらう。

周知のとおり、ニーチェの著作の中には『善惡の彼岸』（1886年）がある。この中においてニーチェは、キリスト教道德のような善惡の評価は支配階級、つまり当時の僧侶階級による自己保存の要求から生じたものであつて、人間の本質的な価値とは何のかかわりもないと前提した上で、むしろ善惡の観念を越えたところ、すなわち“善惡の彼岸”に人間性の深い真実は展

開されると主張した。結局、ニーチェは古い既成の道徳を破壊し、超人の道徳を開拓することを願ったのである。

要するに、ニーチェ哲学のポイントは既成道徳による善悪概念の改革を通して、それを超越した善悪の彼岸に新しい無垢な人間像を形成しようというところにあるといえる。という、ニーチェにおける“善悪の彼岸”とは、既成の世俗的な善悪を超越した超人の境地であると思う。

ところが、芥川は、＜我々は時々善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見るであらう＞と述べていた。これは結局、芥川の＜聖霊＞は＜善悪の彼岸＞を超越した所に存在することを意味する。ニーチェの“善悪の彼岸”は超人の境地であるというのは、先に触れたとおりである。これに倣って言えば、芥川の＜善悪の彼岸＞は＜聖霊＞の境地であるといえる。

芥川は、＜聖霊は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異なるものである＞と述べていた。このような芥川の主張の＜聖霊＞は、ゲーテの主張の＜何ものか＞と同一線上の概念であるというのは、先述した通りである。ゲーテの＜何ものか＞は、＜悪魔的なもの＞でもなく、＜天使的なものでもなかった＞し、また＜神的なもの＞でもなかった。結局、芥川の主張はゲーテに示唆されたことを意味すると言えよう。

要するに、芥川の＜聖霊＞はゲーテの＜何ものか＞と同様に、人間的な観念を超越して働く力なのである。これが“運命”を指すのは、既に前において考察したとおりである。“善悪の彼岸”が、人間的な善悪の区別と対立とを超越した境地であれば、そこは超人間的な力としての＜運命＞が歩ける場所であるのは言うまでもないと思う。という訳で、芥川は＜善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見る＞と主張したのである。

ここで芥川の言う＜善悪の彼岸＞を考えてみると、芥川における“善悪の彼岸”の意味は、ニーチェ哲学のそれとはニュアンスが違ふと思う。ニーチェ哲学においての“善悪の彼岸”は、キリスト教道徳のような善悪の価値を否定し、その善悪の観念を超越した所という意味であろう。しかし芥川の場合は、必ずしも深奥で難解なニーチェ哲学的な概念の意味として“善悪の彼岸”を引用したとは思われない。つまり、悪魔でも天使でもなく、＜神とも異なるもの＞という芥川の主張を見ても分かるように、それは平凡な世俗においての相対的な善悪を意味する性質のものではなく、ただそういう世俗の相対的な評価を超越した、すなわちそれとは性格が違ふ概念であることを暗示する表現としての“善悪の彼岸”であると思う。

〔3〕脳髄の上の聖霊

ところで、芥川は、＜我々は時々善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見る＞と主張していたが、＜しかしロムブロゾは幸か不幸か精神病者の脳髄の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた＞と述べている。

ロンブローゾ（Cesare Lombroso：1835～1909年）はイタリアの精神医学者で、犯罪人類学の創始者である。彼の研究領域は内分泌異常、ビタミン欠乏症の研究から天才と狂気の間接的な関係を研究する病跡学（パトグラフィ）、筆跡学、催眠・心霊現象の研究にいたる広範囲のものであった。特に天才の性格に関する体系的な説明は、彼によって初めて試みられた研究業績なのである。

天才は普通の人と比べて、極めて高い精神能力を先天的にもっているために、その特質についていろいろの解説がなされてきた。その中で最も注目されたのが、ロンブローゾの天才狂気説であった。彼の説によって、傑出した天才の中には多くの精神病者や精神病質者のいることが立証されたのである。その後にE. クレッチマーは天才と精神病との関係にいつそう綿密な

研究をした結果、天才には多くの精神病質が含まれていると述べているが、これはかえって天才の優れた創造的生産活動を促進させていると解釈した。このような学説では、天才に関する精神症状と創造との関係を探めようとする病跡学の研究分野が開拓されたのである。

これを見ると、結局芥川はロンブローゾの研究業績である天才狂気説に関して、詳しい知識をもっていたに相違ないと思う。なぜかという、彼の天才狂気説は天才と精神病者との類似点について論じた説であるが、芥川も本文のなかで＜ロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた＞と述べていて、ロンブローゾのことに触れているからである。

では、＜ロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた＞という芥川の文の意味は何であるか。

この芥川の文は、ロンブローゾの天才狂気説を理解したうえで出た表現であると思う。というのも、＜幸か不幸か＞という表現が、ロンブローゾの天才狂気説をよく説明しているからである。ロンブローゾの説は、天才と狂気の関係に関する体系的な研究で、傑出した天才のうちには、多くの精神病質をもっている精神病質者や精神病者がいることを立証したものであったというのは、先に触れたとおりである。

これは換言すれば、天才のもっている精神病質がその人の才能を押しつぶしてしまう場合もあるが、場合によってはその精神病質が高い精神能力といっしょになって、優れた仕事を生み出す天才となるという解釈なのである。つまり精神病質の活動の如何によって、不幸なことにも才能が押しつぶされて凡人となるか、または幸いにそれが生かされて天才となるか、ということになるであろう。結局芥川は、そのようなことについて＜幸か不幸か＞という表現を使ったと思う。これは、天才と精神病者の関連に関するロンブローゾ独自の理論によく似合う表現であるといえよう。

という、芥川の言う＜幸か不幸か＞は何によって決められるのか。芥川はその決定には、やはり運命の力が働くと見ているに違いない。それは、＜精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた＞という文の＜聖霊＞の言葉を見ても分かると思う。芥川における＜聖霊＞は“運命”を意味しているというのは、既に前述したとおりである。

作家芥川のすべてを知るに足ると言われている「或阿呆の一生」（1927年；昭和2・10月「改造」）の第二章＜母＞には、1914年、巣鴨の癲狂院（精神病院）を見学した時の体験が、＜彼＞という三人称の主人公を軸として描かれている。

狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。廣い部屋はその為に一層憂鬱に見えるらしかった。――（中 略）――醫者は彼の先に立ちながら、廊下傳ひに或部屋へ行つた。その部屋の隅にはアルコールを満した、大きい硝子の壺の中に脳髓が幾つも漬つてゐた。彼は或脳髓の上にかすかに白いものを発見した。それは丁度卵の白味をちよつと滴らしたのに近いものだつた。彼は醫者と立ち話をしながら、もう一度彼の母を思ひ出した。――（下 略）――（注12）（下線引用者）

周知のとおり、芥川の母は狂人であった。芥川はある脳髓の上に卵の白身のようなものを見つけては、ふと亡き母を思い出したと言っている。この際の芥川の心には、精神病者であった母から生まれた“運命の子”としての考えがあったかも知れないのである。しかし、それ以前芥川が発見した＜白いもの＞は、やはり＜聖霊＞という“運命”であったに相違ないと思う。

VI. 結び

「西方の人」のなかには、イエスをマリアに生ませた聖霊に関する芥川の見解が載っている。つまり、第三章の＜聖霊＞がそれであるが、芥川はの中でキリスト教における聖霊の意味とは懸け離れた彼一流の聖霊論を展開していた。そのような芥川の聖霊論について究めてみることに本稿の目的があった。

聖書の中の聖霊は、神またはキリストの霊のことで、新約時代のイエス・キリストは聖霊によって生まれ、また聖霊の力に満ちて宣教活動をするようになった。つまり、聖霊はキリスト教においては極めて重要な概念であり、それは創造者なる神の霊、またはキリスト教の神観という三位一体の第三位格として、人間の霊的経験の中に現臨して働きかける神であった。

しかし、芥川はこのような聖書においての聖霊の意味から離れて、＜聖霊は必ずしも「聖なるもの」ではな>く、＜神とも異なるものである>と宣言しつつ、自由に彼一流の聖霊観の翼を広げていたのである。

芥川は、＜人気のない夜中に突然彼女（マリア）を驚かした聖霊＞に感じて生まれたイエスは、一生の間＜聖霊の支配を受けてゐた>と言っていた。聖霊の神学的な本質を否定し、聖霊がマリアに感じさせて生まれたイエスを皮肉な目で見ている芥川にとって、その聖霊はイエスの“運命”そのものであったことが分かった。要するに、イエスは運命的な父母によって偶然生まれた“運命の子”であったのである。

この偶然による運命的な誕生への芥川の視線は、バプテスマのヨハネの上にも現れていた。つまり、芥川はヨハネの誕生について、＜麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない>と言って、イエスの如くその誕生の偶然性を述べていたのである。平凡性の象徴であるマリアから生まれたイエスが＜天才>となったように、ヨハネも平凡な女から生まれたけれども、偉大なる人物になったと見ていたのである。人間の運命に働くこの偶然性を、芥川は聖書の麦と芥子のたとえで説明していた。芥川にとって麦と芥子は、それぞれ平凡性と非凡性のシンボルであったのである。

ところで、ヨハネの母エリサベツとイエスの母マリアの親類関係に着目した芥川は、人生に働く運命の力に関する自分の観念を、＜麦>と＜芥子の花>のたとえを通してさらに深めていった。つまり、＜麦の中に芥子の花の咲いた>という表現は、“平凡な母から非凡な子が生まれる”という意味であったが、これは偶然という運命に関する芥川の観念をよく物語るといえる。

要するに、芥川にとって＜我々の一生を支配する力>としての聖霊は、運命を意味していたのである。これは、＜我々の運命を司るもの>として＜偶然>を数えている芥川自身の言及からも証明できたと思う。

超人間的で不可思議な力として人生を支配する運命という存在は、イエスの誕生と以後の一生を支配する聖霊に暗示されていたことが分かった。運命に関する芥川のこのような観念は、結局イエスの一生に投影されていたのである。

芥川は、人間の人生を支配するこのような＜聖霊にDaemonの名を与えてゐた>のはゲーテであると主張したが、これは＜Daimon>を＜僕等を超えた力>で＜僕等を支配する>悪魔的なものとしてとらえている芥川にとっては、当然の表現であったことも分かった。

さらに芥川は聖霊の性格について、＜聖霊は悪魔や天使ではな>く、＜勿論、神とも異なるものである>と述べていたが、これは聖霊が善悪という世俗の相対的な評価を超越した存在、すなわち＜善悪の彼岸>に存在する運命への暗示であったのである。

聖霊を運命の意味と見ている芥川の観念は、ロンブローゾの天才狂気説を踏まえても現れていた。つまり、天才の中には多くの精神病質をもっている精神病質者や精神病者のいることを研究し立証したロンブローゾの天才狂気説から、芥川は人間に対する偶然という運命の働きを感じつつ、精神病者の母から生まれた“運命の子”としての彼自身のことをしみじみと考えていたのであった。

以上、芥川における聖霊の意味を調べてみたが、神学的な聖霊の本質とは関係なしに、芥川は聖霊を人間の人生に働く偶然という運命として捉えて、イエスの一生に投影していたことが分かった。

《注》

- (注1) ・笹淵友一、「芥川龍之介『西方の人』新論—とくに比較文学的に—」、石割透(編)、『日本文学研究資料新集20 芥川龍之介・作家とその時代』(東京、有精堂、1987)、168～191頁、参照
- ・佐藤泰正、「テキスト評釈『西方の人』『續西方の人』一校訂・語釈・論評—」、石割透(編)、『日本文学研究資料新集20 芥川龍之介・作家とその時代』、197頁、参照
- (注2) 梶木剛、「芥川における知識人と大衆—『西方の人』をめぐって—」、「國文學」昭和45年11月号、(東京、學燈社、1970)、55頁、参照
- (注3) 海老井英次(編)、『鑑賞日本現代文学11 芥川龍之介』(東京、角川書店、1981)、311頁、参照
- (注4) 増田誉雄 他(編)、『新聖書注解 新約1』(東京、いのちのことば社、1995)、123頁、参照
- (注5) 『聖書辞典』(東京、新教出版社、1994)、463頁、参照
- (注6) 尚学図書(編)、『国語大辞典』(東京、小学館、1982)、802と2051頁、参照
- (注7) 芥川龍之介、『芥川龍之介全集』第四卷、(東京、岩波書店、1996)、159～161頁
- (注8) 菊地弘 他(編)、『芥川龍之介事典』(東京、明治書院、1985)、84頁、参照
- (注9) 芥川龍之介、『芥川龍之介全集』第十三卷、(東京、岩波書店、1996)、29頁
- (注10) ゲーテ(著)、菊盛英夫 他(訳)、『ゲーテ全集』第十卷、(東京、人文書院、1976)、283頁
- (注11) 芥川龍之介、『芥川龍之介全集』第十六卷、(東京、岩波書店、1997)、21～22頁
- (注12) 上掲書、39頁